

古文化

受け継がれる、日本屋根の伝統美。

第129号



比叡山延暦寺 根本中堂
[滋賀県大津市坂本本町]



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

比叡山 延暦寺

[滋賀県大津市坂本本町]

由緒・歴史

延暦寺は、比叡山全域を修行道場とし、「東塔」「西塔」「横川」の三つの地域で構成されています。その「東塔」の中心的構造物であり、延暦寺の総本堂である「国宝 根本中堂」(表紙写真)は、最澄が最初に開いた「一乗止観院」で、延暦7年(788)を起源とします。最澄亡き後、「延暦寺」の寺額を勅賜され、比叡山延暦寺と称するようになりました。また、一乗止観院を「根本中堂」と改称しました。

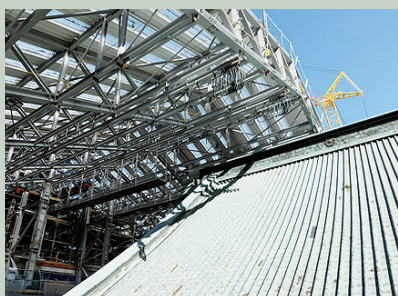
元亀2年(1571)、織田信長による比叡山焼き討ち(元亀の兵難)に遭い、根本中堂をはじめ、瑠璃堂を除く山内の全建造物が焼失しました。現在の根本中堂・廻廊は、寛永19年(1642)に徳川三代将軍家光の命で再建されたもので、中庭を廻廊がコの字形に取り囲んでいます。8年をかけての大工事は江戸初期を代表する建築物となりました。

寛永の再建以来、数回修復の手が加えられましたが、外観上大きく変化したのは、寛政10年(1798)の屋根葺材の変更です。従来の「桧葺」から「瓦棒銅板葺」に仕様を替え、現在もこれを継承しています。また、再建時に「桧葺」屋根を配していた廻廊は、明治の改修時に材料調達が困難だったため「柿葺」に変更され、昭和の改修時に「桧葺」に戻されました。

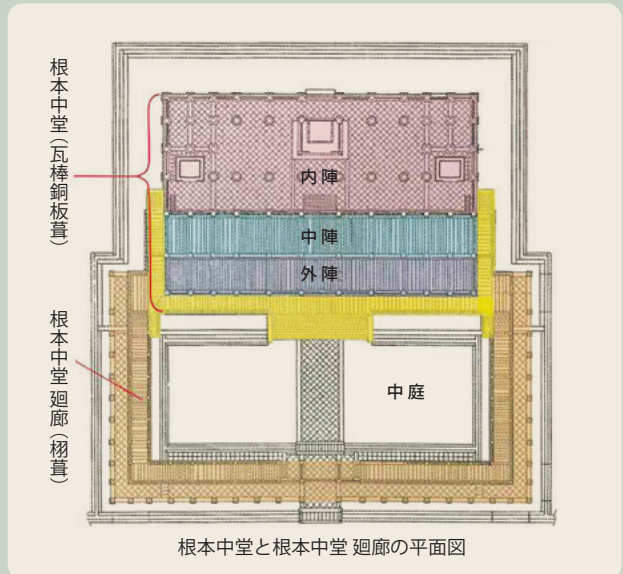
平成の大改修「国宝 根本中堂」

平成28年(2016)より約60年ぶりの改修工事を行っています。気象の影響を受けることなく円滑・安全に改修作業を進めるため、工事用覆屋「素屋根」を約2年かけて建設し、葺き替えの様子を間近で見学していただける修学ステージを設けました。

根本中堂の屋根は、木材の下地材の上に、銅板を屋根形状に合わせて加工して止めています。風雪雨にさらされた銅板には、切れやめくれ



スライド工法を用いた建設途中の「素屋根」



根本中堂と根本中堂 廻廊の平面図

などの破損が生じているため、屋根全体の葺き替えを進めています。さらに、下地木部やその下の土居葺の傷み具合によっては、当該箇所も修理も行ってあります。また、廻廊の屋根はサワラ材を使用した「桧葺」です。屋根全体に板が割れたり、軒先が腐朽するなどの破損が見られるため、軒付を含めた屋根全体を葺き替えます。

一年を通して高い湿度環境下にある根本中堂は、地面に近い柱の足元や床周り材の腐朽が顕著です。今回は特に著しい2本について根継ぎ修理を行います。彩色については、わずかに残る塗膜の科学調査と古文書解読から江戸期の彩色に近付けることを試みました。



柱足元の腐朽の状況

「国宝 根本中堂」と「重文 廻廊」の価値を損なわないよう詳細な調査を行い、修理方針を決め、約10年の歳月をかけて慎重に改修工事を進めています。根本中堂と廻廊の屋根葺き替えのみならず、内外部の彩色塗装の塗り替えや保存処置、柱や床などの修理のほか、飾金具などの細かな修理も行い、江戸期の寺院建築の匠の技と意匠を後世に伝えていきます。



根本中堂の大屋根「瓦棒銅板」の解体作業

主任文化財屋根葺士 検定会 実施される

茅葺【第21回】● 令和4年10月24日(月)～10月29日(土) / 1名(茅葺師)

本年度も受験者1名となり、今年は茅葺での受験となりました。施工は流れるように手順よく、屋根を葺いていったように見え、危なげなく模型は完成していたように思います。各講師来賓の皆様からの採点でも大きく減点される項目はなく、概ね好評でした。学科試験についても計算問題などはすべて正解を取るなど、責任者とし



検定会会場風景

[会場●山南ふるさと文化財の森センター]

ては文句のつけようのない試験結果となりました。そのため満場一致で合格とさせていただきました。

去年度の再受験生(檜皮葺)については本年度、学科試験を再度行いました。結果、合格点には達しましたが、現場責任者としては不安が残ることから、補講を行うことを条件に合格としました。



講師の先生たちの講義を聞く受講生

主任文化財屋根葺士 認定証 更新講習会 開催

日時 ● 令和4年11月25日(金) 10:00～12:00
会場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

今年度も、京都女子大学より鶴岡典慶教授を講師にお迎えし、更新講習会を行いました。多くの更新者が参加し、屋根葺士26名の更新を行いました。

例年続けてきている更新講習会ですが、本年度についても大規模感染症の影響が収まらない状況でした。また、高齢により更新されない方や、お亡くなりになられた方も出てきたことを非常に残念に思います。このような社会状況の中でも京都センターに足を運んでいただき、更新講習に参加してくれた皆様、また各事業者様には感謝

を申し上げます。

講習参加者が鶴岡様の講義に耳を傾け、特に効率といった点について関心を持って聴いていたように思います。一人前の職人が1日に施工できる面積が減っているのではないのか、という投げ掛けがありましたが、これは社会的要請、休みであるとか、休日出勤や残業であるとか、様々な福利厚生要素が絡んでいると思われます。各事業者においても、これらの社会的要請を無視するわけにはいかず、職人と職人の家族に対する要請、義務にも応えつつ文化財施工を行わなければなりません。今現在でも出張が多く大変な仕事ではあると感じているので、このあたりのバランスをどうとるのか、考えていかなければならないと思います。

保存会としても上記を含め、主任技術者のさらなる意識向上と地位向上、技術向上のため、講習会を通じて新しい知見を身に付けられるように努力していきたいと思

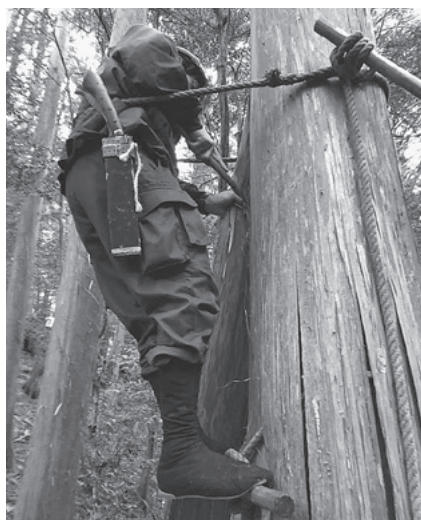
令和4年度 檜皮採取者(原皮師)中級研修

令和4年度の檜皮採取者養成研修は、11名の研修生にて、仏通寺国有林から始まり、賤母国有林、栃本市有林、羽賀寺、西通山国有林、岡山個人林、城山国有林にて、全14クルールの研修を行っています。天候不順の山での

研修になりますが、皆、技術の研鑽に励んでいました。本年度も研修林を提供していただきました皆様に感謝申し上げますとともに、今後ともご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



形状に注意しながらヘラ入れをする



ぶり縄を使った足掛りで皮を剥きあげる



さらに一段登り、剥きあげ作業を繰り返す



檜皮を結束するためにワクに積み上げる



結束した檜皮を切断する

令和3年度 中部森林技術交流発表会 国有林の部「優秀賞」を受賞

昨年度開催されました、中部森林管理局主催の「令和3年度中部森林技術交流発表会」において、国有林の部・優秀賞を受賞いたしました。長年続けてきた取り組みが、最高の評価をいただき、大変光栄に思うとともに、心より感謝申し上げます。最後になりましたが、木曾森林管理署 南木曾支署の皆様へ深く感謝申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



令和4年度 賤母国有林にて檜皮採取見学会

参加校 ● 南木曾町立南木曾小学校、
長野林業大学校
期 日 ● 令和4年9月21日(水)、10月3日(月)
会 場 ● 賤母国有林(長野県)

本年度も森林環境教育の一環として、9月に南木曾小学校、10月に林業大学校が檜皮採取見学会を行いました。檜皮採取の技法を見て、触れる場を提供し、日本の伝統技術・文化財に触れ合う取り組みとして、毎年のように原皮師を講師に見学会を行っております。

南木曾小学校3年生からは、「木を登ってむくのがすごいかっこよかったです」「皮のむき方を初めて知ってやってみたいと思いました」等、たくさんのお声をいただきました。

長野県林業大学校1年生は、研修生が作業する現場ま

で山を登り、皆興味津々に作業を見学していました。

今後も、檜皮採取見学会を通じて、日本の技を知って感じてもらえるよう、続けて参ります。



檜皮採取の様子を凝視する長野林業大学生



檜皮採取を見学する南木曾小の児童たち



檜皮結束の作業を写真や動画におさめる長野林業大学生

令和4年度 国有林野事業 業務研究発表会

期 日 ● 令和4年11月24日(木)
会 場 ● 南木曾森林管理署

林野庁主催の「令和4年度国有林野事業業務研究発表会」が開催され、「森林ふれあい部門」にて、木曾森林管理署 南木曾支署 森林整備課 齋藤由晃様とともにオンラインにて合同発表をさせていただきました。この発表会は、現場業務を通じて得られた取り組みの成果を広く普及するとともに、組織全体

で共有し、今後の取り組みにつなげていくことを目的に開催されています。

審査の結果、入賞とはなりませんでしたが、今後も檜皮採取者養成研修事業、歩道・森林の整備、採取見学会などの普及啓発を行っていくとともに、日本固有の技術、檜皮葺に必要な檜皮の資材確保、そして再生可能な資源を生産するモデルフィールドとしての有効な国有林活動に取り組んでまいります。

令和4年度 檜皮採取技術査定会

期 日 ● 令和4年10月13日(木)、14日(金)
会 場 ● 仏通寺国有林(広島県)

檜皮採取技術査定会は、檜皮採取研修生の日頃の研修成果を査定するとともに、技術の継承と向上を目的とし毎年行っております。

当日は、文化庁文化財資源活用課(修理指導部門)文化財調査官 結城 啓司様をはじめ保存会会長及び理事、中級研修生が参加し、総勢15名で行いました。査定を受ける研修生は3名、査定員は指導員2名、指導補助員1名の3名にて実施しました。天候にも恵まれ、研修生は日頃の成果を存分に発揮しながら採取作業にあたりました。文化庁の結城様も研修生の作業を熱心に見入っておられました。

今後は、査定員の採点をもとに日頃の研修の年間実績考課値を加味し、担当役員が技術ランクを決定します。この度の査定会にご協力いただきました広島森林管理

署、並びに仏通寺の皆様にご心より感謝申し上げます。



作業を間近で見つめる結城調査官



緊張の瞬間、最初のヘラ入れ



結束した皮を切断する研修生



剥きあげ作業を進める研修生



出来上がったばかりの丸皮を前に集合した参加者の皆さん

文化財屋根葺士養成研修 第24期生 後期研修 終了

去る令和4年9月22日をもって後期研修を終了し、第24期文化財屋根葺士養成研修のすべての課程を終了いたしました。後期研修では卒業現場実習に向けた材料整形をはじめ、模型や実際の保存修理現場での葺き実習、座学では実測及び製図の実習、建築史演習では滋賀県と京都市内の各所を講師の方の指導の下、2日間にわたり実施しました。

9月5日～16日、研修の集大成となる卒業現場実習は三井寺(園城寺)様のご協力を得て実施し、平葺のみならず役所も担当させていただき、2年間にわたる研修の成果を十分に発揮することができました。

今期の研修ですが、当初は頼りなさも感じられた研修生の皆さんも、研修が進むにつれてたくましくなっていました。先日、公開セミナーで技術の実演をしていただきましたが、すっかり職人の顔になって堂々と実演さ

れている姿を目の当たりにし、研修で学んだことが少しずつ身につになってきているのかなと感じます。

研修が終了したとはいえ、これで終わりではありません。ここはあくまで通過点であり、屋根葺士として生きていくためのスタートラインに立ったにすぎません。驕ることなく常に謙虚に技術と向き合っていってほしいと心から願います。

前期研修も含め、第24期の養成研修事業にお力添えをいただいた講師の方々、指導員の皆さん、そして行政をはじめとした関係機関の皆様方に、紙面を借りまして厚く御礼申し上げます。今後もご指導のほど、よろしくお願いいたします。

座学



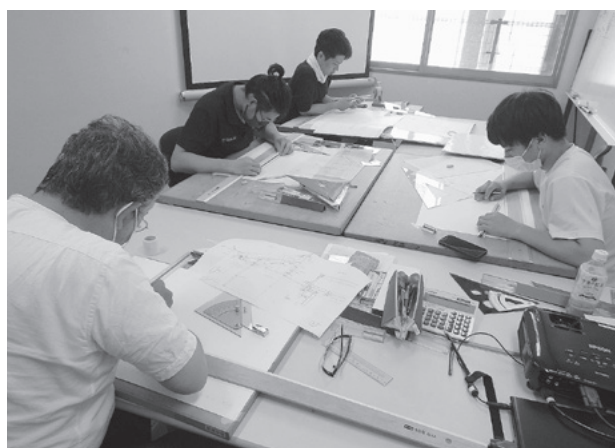
北野天満宮「建築史演習」



石山寺「建築史演習」



実測の様子



製図の様子

材料整形



竹釘製作実習の様子



檜皮材料整形実習の様子

卒業現場実習



上目皮張り



箕甲葺

留め上目皮張り



箕甲葺出し



実習 施工後

令和4年度 屋根板製作者養成研修を実施

期 間 ● 令和4年9月26日(月)～10月6日(木)
講 師 ● 嘉本 洋士
(株) 児島工務店 島根工場 工場長

屋根板製作選定保存技術の保存団体として平成30年9月25日に認定を受けたことを契機に、平成31年度より屋根板製作者養成研修事業を開始しました。今期の期間は10日間。島根県にて、研修生3名を対象に実施しました。

杉材を用いて主に平板1.0尺×1.0分の製作ときわら椽材で軒せんがの銃掛げと大割を実習しました。原木の見分け方、材の取り方、木取り方法の基本など一つ一つの工程を実際

に見せながら指導し、研修生も熱心に聞き入っておりました。最初のうちは慣れない作業に戸惑いも見られましたが、工程を何回も繰り返すうちに理解度も高まってきたようで、最終日が近くなる頃には形になっていました。

文化財建造物を適切に保存していくためには良質な資材の確保は欠かせません。研修生には、こういった研修を通じ、資材確保から屋根葺工事までを一連の流れとして理解し、我々の技術が森林資源に支えられていることを胸に刻んでいただきたいと思います。

来年度以降も研修は続きます。保存団体として求められる役割は多岐に渡りますが、一步一步着実に進めていくためにも多くの皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。



みかん割り分割前の木取り



銃掛けの様子



板へぎ作業

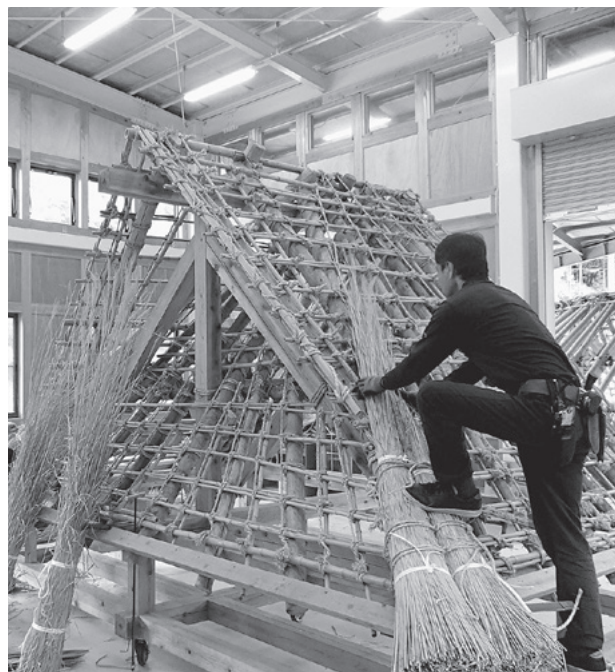
令和4年度 茅葺中級研修

今年度の茅葺中級研修では、7月11日(月)～16日(金)まで丹波市立山南ふるさと文化財の森センターで隅茅の作成、及び軒先の取り付け、また、9月27日(火)～10月9日(日)まで兵庫県三田市大川瀬 住吉神社で差し葺き修理、1月16日より静岡県伊東市の大室山で茅刈りを行いました。

研修では、当会正会員 長崎貴宣・大西謙之・熊谷秋雄がそれぞれ指導にあたりました。研修生は、栃木、新潟、山梨からの参加となりました。甲信越地方、北陸地方で活動する研修生には、関西地方の屋根は、新鮮で独特な難しさがあったように思います。

大室山の茅刈りは、地域の方々との連携を深められ、今後もさらに継続していける活動だと思います。採取した茅も良質なものでした。

本年度は、隅茅作成取付研修1回、差し葺き研修1回、茅刈り研修1回をそれぞれに行うことができましたこと、各関係者の皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。



隅茅取り付け

丹波市立 山南ふるさと文化財の森センター

指導員 ● 長崎 貴宣 (明石屋根工事(有))

研修生 ● 3名 / 加々美 栄 (伝匠舎(株)石川工務所)

新津 侑樹 (伝匠舎(株)石川工務所)

中島 信 (㈱茅葺屋根保存協会)



研修内容の説明



隅茅取り付け



隅茅取り付け指導

住吉神社 舞殿

指導員●長崎 貴宣(明石屋根工事有)
研修生●1名/島田 伊織(株越乃かやぶき)



隅茅の取り付け



指導員による軒下の補修指導



平葺の叩き揃え

大室山 茅刈り

指導員●大西 謙之、熊谷 秋雄
研修生●4名/山口 成貴(田中社寺株)
富樫 忠義(有熊谷産業)
猿橋 成博(株茅葺屋根保存協会)
八ッ橋崇市郎(株越乃かやぶき)



茅刈り



研修開始



結束・運搬

令和4年度 文化財研修会

日 時 ● 令和4年10月21日(金) 13:00～15:30
会 場 ● 法華経寺 祖師堂、客殿
(千葉県市川市中山2-10-1)

この度は、千葉県市川市にある国指定重要文化財 法華経寺 祖師堂の保存修理工事現場を見学させていただき、研修会を行いました。コロナによる影響も幾分弱まってきたとはいえ、遠路はるばる全国から正・準会員約50名の参加がありました。

正中山 法華経寺は、鎌倉時代の高僧・日蓮聖人が最初に開いた寺であり、子育て守護である祈願成就の御尊体は「中山の鬼子母神さま」として広く全国信徒の信仰を集めています。祖師堂の他にも国指定重要文化財は五重塔・四足門・法華堂、国宝の「観心本尊抄」・「立正安国論」、重要文化財61巻ほか、百数十点の日蓮大聖人御真筆を格護^{かくご}している聖教殿など、数多くの文化財を有しています。

まず始めに、法華経寺貫主 新井日湛^{にったん}様より自身の出自や、経験などからのありがたいお言葉とともにご挨拶をいただきました。次に、法華経寺主事 佐藤憲秀様より法華経寺の来歴とともに、色々な人間模様など様々なお話をお聞きし、大変勉強になりました。そして、文化財建造物保存技術協会 田村 匠様より祖師堂の保存修理工事の概要を説明していただきました。今回の工事は、主に柿葺屋根の葺き替え工事となっております、中でもこの

祖師堂は日本でも珍しい比翼入母屋造りの屋根となっています。その建物の構造や修理方針などについての説明をしていただきました。その後、実際に修理工事現場にて工事状況を見ながら、各々意見交換を行いました。

約半日の短い時間でしたが、実際に足を運ぶことによって得られる知識や見解はやはり貴重なものだと思います。また、ここ法華経寺は日常的に地元の住民が境内を行き来する、正に生活に溶け込んだお寺です。そして、その日常を支えていく一端に我々も加担している仕事だということを改めて意識させられます。

今年もこのような研修会を行うことができ、現場を提供いただいた法華経寺様、文化財建造物保存技術協会様、元請けや各業者の皆様、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



法華経寺 客殿での研修会風景

研修会 「法華経寺 客殿」

- 開会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 会長 大野 浩二
挨拶 ● 法華経寺 貫主 新井 日湛 様
講話 ● 法華経寺 主事 佐藤 憲秀 様
題目「法華経寺の歴史について」
概要説明 ● 公益財団法人 文化財建造物保存技術協会 田村 匠 様
「保存修理工事概要」
閉会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 執行理事 友井 辰哉

見学会 「重要文化財 法華経寺 祖師堂 保存修理工事現場」

研修会



法華経寺 貫主 新井 日湛様の挨拶



法華経寺 主事 佐藤 憲秀様の講話



(公財)文化財建造物保存技術協会 田村 匠様の概要説明

見学会

法華経寺 祖師堂の修理工事現場を見学する参加者



京都女子大学「伝統技法演習」 課外講義を実施

日時 ● 令和4年11月30日(水)・12月7日(水)
13:00～15:30
会場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

本年も京都女子大学の学生を招き、合計2回、学生への講演を行いました。コロナの都合、学生を二手に分けて、一つのグループには下の実習室にて実際に皮切りを見てもらい、感染症対策を施した上で、多人数にならないように一人ずつ竹釘打ち体験を行っていただきました。

もう一つのグループには例年同様に、選定保存技術に関する話、文化財の植物性屋根に関する話などを聞いてもらい、保存会の存在意義や全国にある植物性屋根に関

する資料を見てもらいました。

例年、学生さんに説明していることですが、京都にあふれている植物性屋根の文化財について、一般の人には殆ど知られていない状態です。下手をすると、パンフレットで予習してきている外国人のほうが寺社仏閣に関する歴史や成り立ちに詳しいことがあり、質問をされても日本人である我々の方が答えられないということが多いように思います。自分の国の文化を説明することができないのは恥ずかしいことなので、ユネスコの無形文化遺産に認定されているような文化的に価値があり、良い建物で伝統技術があるということを、自分の言葉で説明できるようになってほしいという意味の説明をして、講演の締めとしました。



皮切り実演を見学



竹釘打ちの体験



植物性屋根の説明に耳を傾ける学生



映像で詳しく説明する担当者

令和4年度 ふるさと文化財の森システム推進事業 「森が支える日本の技術 2022 公開セミナー」開催

コロナ禍の波は続き、依然大変な世の中ではありますが、昨年を引き続き事業を行っていく方針となりました。感染予防には十分な対策を取り、見学会、講演会を執行了いました。

例年同様、清水寺境内においては、屋根葺・皮切りの実演見学、ビデオ上演などの催しを行いました。また、今年は、去年取り止めとなった竹釘打ちの体験も実施しました。京都市文化財建造物保存技術センター内では鶴岡 典慶様を招いて、「文化財建造物の魅力：木を觀賞する」についての講演を行い、以前のように2日間にわたる開催となりました。少しずつ海外からの観光客も戻ってきており、活気を取り戻しつつある様に感じられた2日間でした。来ていただいた方には檜皮葺、柿葺のことを少しでも肌で感じていただけたのではないかと思います。

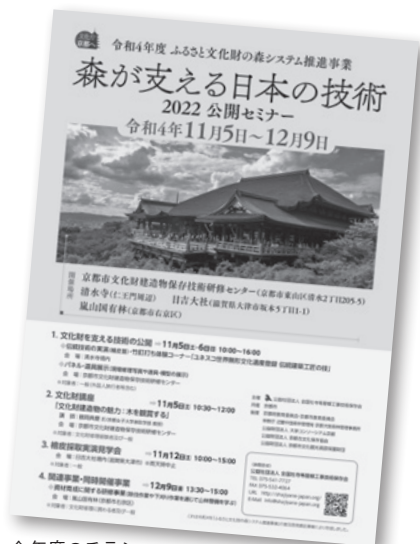
翌週、場所を滋賀県坂本の日吉大社に移し、檜皮採取

の実演見学会を行いました。今年は午前中に神社の例大祭が行われたとあって、多くの参拝者の方々に実演を見ていただくことができました。ほとんどの方が初めて見る作業のようで、多くの驚きと共に関心を寄せていただきました。

檜皮葺や檜皮採取の実演を見てもらうと、「あっ、これテレビで観たことある」とか「口に釘をたくさん入れて打つんだよね」と言う声を聴くことがあります。檜皮葺という言葉が以前に比べて認知されつつあるのだと感じます。と同時に、今後も様々な形で発信を続けていくことの大切さを実感しました。これからもこの日本独自の技術を途絶えさせることのないよう、また、もっと多くの方々に関心を持っていただけるよう、日々精進してまいります。

今年もこのような機会を与えていただき、関係者の皆様にこの場をお借りして御礼を申し上げます。

- 名 称** ● 令和4年度 ふるさと文化財の森システム推進事業「森が支える日本の技術 2022 公開セミナー」
- 主 催** ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会
- 期 日** ● 令和4年11月5・6日(土・日)、12日(土)、12月9日(金)
- 会 場** ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター(京都市東山区清水2丁目205-5)
清水寺 仁王門周辺(京都市東山区清水1-294)
日吉大社(滋賀県大津市坂本5丁目1-1)
嵐山国有林(京都市右京区)
- 共 催** ● 京都市
- 後 援** ● 京都府教育委員会、京都市教育委員会、林野庁 近畿中国森林管理局 京都大阪森林管理事務所、
公益財団法人 大学コンソーシアム京都、公益財団法人 京都古文化保存協会、
公益財団法人 京都市文化観光資源保護財団



清水寺境内地 会場風景

開催内容

1、文化財を支える技術の公開

期 日 ● 令和4年11月5・6日(土・日)

会 場 ● 清水寺境内

京都市文化財建造物保存技術研修センター

(1) 伝統技術の実演「ユネスコ世界無形文化遺産登録 伝統建築工匠の技」

1. 檜皮葺
2. 皮切り



(2) 体験コーナー 竹釘打ち



(3) パネル・道具展示 (現場修理写真や道具・模型の展示)



2、文化財講座

「文化財建造物の魅力：木を觀賞する」

期 日 ● 令和4年11月5日(土)
会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術センター
講 師 ● 鶴岡 典慶氏(京都女子大学家政学部 教授)
対象者 ● 技術者及び一般



3、檜皮採取実演 見学会

期 日 ● 令和4年11月12日(土)
会 場 ● 日吉大社 境内林
対象者 ● 一般



4、関連事業・同時開催事業

資材育成に関する研修事業
(除伐作業や下刈り作業を通じて山林整備を学ぶ)

期 日 ● 令和4年12月9日(金)
会 場 ● 嵐山国有林(京都市右京区)
対象者 ● 文化財修理に携わる者及び一般



除伐作業



フェンス補習作業

「文化庁 日本の技フェア ～文化財を守り続けてきた匠の技～」開催

日時 ● 令和4年10月22日(土)10:00～17:00
 〃 10月23日(日)10:00～16:00
会場 ● ベルサール秋葉原1階イベントホール及び、
 地下1階ホール(東京都千代田区外神田3
 丁目12-8 住友不動産秋葉原ビル)

昨年と同様に秋葉原にて行いました、昨年と同じく完全予約制という形をとって、感染症対策のため完全に開

放された屋外空間での開催となりました。通りすがりの人たちが興味を持って、その場で予約を取り見ていくという人たちが増えたように思います。人の波も去年よりは遥かに多く感じ、多くの見学者、体験者が訪れていました。

当保存会からは檜皮屋根葺模型を1基搬出し、こちらを葺き上げるという形で展示を行いました。また、体験型模型を用意し、フェアの参加者には竹釘打ち体験をしてもらうことも本年は行うことができました。



檜皮葺の実演に集まる大勢の見学者



屋根金槌を握り、初めて見る檜皮に竹釘を打つ子ども



外周部分に位置していたので、通行人の興味を引く場所での展示となった。

令和4年度 特別講座 開講(全2回)

第1回「文化財管理者としての心構えについて」



いそのかみじんぐう
石上神宮
宮司 森 正光

日時 ● 令和4年11月5日(土)14:00~16:00

会場 ● 文化財建造物保存技術研修センター

大和王朝の宝物庫を兼ねた武器庫だったと言われ、日本最古の神社の一つである石上神宮。今回は、宮司のお立場から文化財管理者としての責任や心構え、ご苦労やエピソードなどをお話ししていただきました。

【講演内容要約】

いそのかみじんぐう 石上神宮の由緒

奈良県は山が7割ぐらいを占め、その北部東寄りに位置しているのが天理市です。石上神宮は奈良県天理市にある日本最古の神社の一つで、標高266mある布留山の北西麓の高台、標高130mほどのところに鎮座しています。奈良盆地の山裾を縫うように南北に続く「山の辺の道」は、日本最古の道の一つと言われ、年間延べ約30万人の老若男女からハイキングコースとして親しまれています。沿道には陵墓や古墳をはじめとする、遺跡、古い社寺などが数多くあり、なかでも石上神宮から大神神社までの道のりは、「古事記」にうたわれた青垣の山々を眺めながらの古代ロマンが感じられるコースとなっています。「日本書紀」には、まだ皇太子だった武烈天皇に求愛された物部氏の娘「影媛」が、追い詰められた恋人の身を案じて、山の辺の道を泣きながら追い掛けたとい



国宝 拝殿

う悲しいお話が残されています。現在は東海自然歩道の一部として整備されています。

石上神宮の北側には布留川という一級河川が流れていて、麓には縄文の晩期から中世に至るまでの広い布留遺跡があります。古代豪族物部氏の一族が生活していた集落遺跡で、馬の牙や縄文式の土器類、武器関係などが出土しました。「古事記」や「日本書紀」に最初に出てくる神社が石上神宮であり、物部氏の総氏神として今に至るまで信仰されています。

しちしとう 国際交流を物語る「七支刀」

文化財となる建物もありますが、宝物としては国宝となっている「七支刀」が有名です。一本の幹から枝刃が交互に出ている特異な形で、全長は74.8cm、表面に34文字、裏面に27文字の金の銘文が記載されていますが、所々字が読みづらくなってきています。日本書紀の中の神功皇后摂政52年に「朝鮮の百済から日本に奉納された」という記載があります。それに相当する金象嵌で刻まれた銘文には、泰和4年という年号が記載されていますので、おそらく369年に百済で作られ、372年に日本に入ってきた一番古い刀だろうと言われており、国宝に指定されています。

石上神宮の社伝では枝が6つあるので「六叉鉞」と称されてきましたが、朝鮮半島では奇数が陽数、偶数が陰数と偶数より奇数が重んじられていた背景や刀身に記された銘文により、正面の幹も数に含めた「七支刀」と称しています。厚みは5ミリ程度あり鋼でできている刃は両刃です。鉄を叩いて作られていると言われてきましたが、鍛造では思うように真っ直ぐにはできず、鑄造をさらに熱処理しているのではないかと



国宝「七支刀」

考えられています。ただ現在もはっきりしたことはわかりません。

東京国立博物館や、奈良国立博物館、九州国立博物館に貸し出しを行いました。元々韓国の百済でできたものですから、そちらからも展覧依頼が届くのですが、国外に持ち出したことはありません。輸送方法ですが、どこでどう狙われるかわかりませんので、私たちにすらその輸送ルートは明かしてもらえません。そのくらい重きを置いている刀ということになります。

重要文化財となっている鉄盾については、2面存在します。1面は当神宮の神庫で保管し、もう1面は東京国立博物館に寄託しています。物部氏が大嘗祭の祭典の時に邪悪なものを防ぐ目的で盾を掲げたという記載があり、儀式用の盾ではないかと言われています。

参拝に来られる人の中には、「宝物館はないのですか?」「国宝の七支刀を見せてもらえないのですか?」という方がいますが、所有者としては1600年あまり守ってきたものを、次の1600年も守っていかなければならないと考えていますので、「はい、どうぞ」とお見せするわけにはいかないと考えています。

神宝が埋齋される禁足地

石上神宮は創始以来ご本殿のない御社として続いてきました。国宝の拝殿の裏を禁足地と言い、そこに神様が鎮まっているとしてご本殿はありませんでした。平安時代の延喜式にもお社がなかったと記されています。明治7年(1874)に水戸の国学者菅政友が大宮司で来られ、禁足地の発掘が行われました。「延喜式」に書かれてある史実通りにご神体の剣が出土されました。他に出土した各種玉や管玉、環頭大刀柄頭などは



重要文化財「硬玉勾玉」



重要文化財「環頭大刀柄頭」など



重要文化財「鉄盾」

古墳時代の前期のものと言われ、全て重要文化財の指定を受けました。何に使われたのかわからないようなものも出土しています。禁足地の真ん中しか発掘していませんので、周りの発掘もしてはどうかと様々な学者に言われますが、最も神聖な霊域としてお祀りしている神域なので、そういうことはしないという立場を守っていると思っています。

影響を及ぼす野生動物

境内は73,000坪余り、甲子園球場の7倍弱程度の大きさがあります。その中の6割程度は社叢で、県の天然記念物の指定を受けています。保護林であり、禁猟区でもある社叢には、猪、狐、たぬき、てん、ムササビなど様々な動物が生息しています。例えば猪は、大きい体をしていますが好物のみみずを掘り返して食べます。稲刈りをしようかなという日に、稲穂が突っている真ん中をミステリーサークルのように暴れてみみずを食べたりします。昼間は保護林に住んでいて、夜中になると周りに出てきてものを食べて、また保護林へ逃げ帰るという生活をしているようです。

また、境内地でびっくりするぐらいの鹿に出くわすことがあります。奈良から鹿が入ってきているようで、農家の方もその被害に悩まされています。檜皮葺の屋根が新しいうちはいいのですが、繁殖期になったムササビやテンは、古く弱くなった屋根を掘り返して中に入り、子供を作ります。そうになると、ムササビなどを中から取り出してから修理をしなくてはならな



境内地内のニワトリ

く、始末に悪いものがあります。野生動物による被害は深刻な問題として捉えています。

国宝で有名なのは七支刀ですが、境内で一番有名なのはニワトリです。境内にはニワトリが60羽程度いると思いますが、夜に襲われたり食べられたりして、時々数が変わります。たち、てん、ハクビシンに狙われて、参道に羽だけが散らばっているということを目にすることもあります。また、朝になると見たことのないニワトリがいることもあります。夏の夜店で売られているひよこは全部オスで、大きくなると朝の3時ぐらいから鳴き出します。どこにも引き取り手がないので、困って石上神宮に捨てにくるという方が結構います。ペットは最後まで責任を持って育ててほしいと思います。



修理前／国宝 拝殿



修理後／国宝 拝殿

止むを得ない樹木伐採

国宝の拝殿は令和2年と3年の2か年で葺き替えを行いました。以前は昭和62年に葺き替えましたので、大体35年経過しています。修理修繕だけでは目立たないので、やったという実感がなかなか湧かないものがあります。ですから、あまりお金を使いたがらないという国や地方がなきにしもあらずだと思います。今回の修理工事では塗り替えも行って、その年の11月の終わりに工事用の足場の解体までが完了しています。

修理前と後の写真を見ていただくとわかると思うのですが、拝殿の屋根にかかる樹木をだいぶ伐採しました。樹木が覆い重なっていると、常にその下がぬかるみますし、同じところにいつも滴が落ちるので、檜皮の屋根を長持ちさせるためには伐採も仕方のないことです。特に、両側面は影響が大きく、雨漏りと同じような状態になっていました。今後も35年程度はもってほしいと思っています。臨時的に無理を言って杉皮で葺き替えてもらったこともあります。

所有者の手でお金をかけて修理できればそれに越したことはないのですが、着工届を出せ、予算はどうかかなど、自分の建物であっても自由に修理をすることができないのです。皆さんが寺社仏閣を見られて傷みが酷

いものがあつたとしたら、それは文化財の建物であることが多いと思います。勝手に触るわけにもいかず、極力ギリギリまでなんとかそのまま置いているのが現状のようで、修理の順番待ちです。京都、奈良、滋賀県では檜皮葺の屋根が多く、よって古い建物や国宝・重要文化財が多いので修理がスムーズに回っていきません。また、お金が潤沢に行き渡りませんので、思うような修理ができないのです。

信仰面から考えると、樹木を伐採すると神聖さや荘厳さなどが失われてしまうように思います。しかし、文化財だと、特に危険木の場合は切らざるを得ないことがあるのです。県からの指導が入るのですが、かといって伐採費用は全額所有者の負担となります。国宝・重要文化財の屋根の場合は、2～4割の所有者負担になることもありますので、維持管理をしていくのは結構難しい状況にあります。

拝殿内側のベンガラ塗り替えも行いました。内部は非常に美しくなりました。前回はいつ行ったかの記録はありませんでしたが、現在は修理報告書の記録があります。法隆寺の金堂が火事になった後から報告書が積極的に残されるようになったと思います。また、向拝の墓股を塗り替えようと化学分析が取り入れられ、その調査結果に基づいて当時の色が復元されました。

文化財の歴史的価値

拝殿の一番古い棟札は文明2年(1470)、一番新しいもので安政6年(1859)でした。拝殿は、永保元年(1081)に白河天皇が宮中の神嘉殿を寄進したものと伝えられており、向拝や左右の廊下はその後付け足したものと考えられています。昭和16年(1941)まで背面には壁がなく、禁足地まで通り抜けていました。棟札が示すように、時代、時代で人々の使い勝手の良いように形を変えてきているのです。棟札6枚を含めて、昭和29年(1954)に国宝の指定を受けました。

楼門については、後醍醐天皇の時代に建立されたと考えられ、明治39年(1906)に重要文化財に指定されています。鐘楼門として上層に鐘を吊していましたが、明治



重要文化財 楼門



国宝 摂社 出雲建雄神社 拝殿

の初め頃には廃仏毀釈の考えが広まり、取り外されてしまいました。

摂社 出雲建雄神社拝殿は、同じく廃仏毀釈で廃寺となった「内山永久寺」の鎮守社の拝殿を大正3年(1914)に譲り受けたものです。こちらは25年程度で葺き替えをしています。屋根の勾配が非常に緩やかで、傷みが激しく、修理までの年数が短いのですが、中央の唐破風は原始の形を留め、繊細で優雅な姿を現しています。鎌倉時代初期の建立と考えられ、同じく昭和29年(1954)に国宝の指定を受けました。

未来に生かす文化遺産の保存

以前、摂社 出雲建雄神社拝殿の檜皮葺き替えをしたとき、覆いかぶさっている樹木を伐採しました。そして、唐破風のところに、見た目には問題がありますが、重さを支えるための耐震補強用鉄骨を入れました。今回は解体修理になると言われていますが、私たちや県の関係者もいなくなるため、今後の修理方針がどうなっていくのか、どうやって維持されていくのかはわかりません。

また、この建物は平成21年(2009)に不審者による放火の被害に遭いました。天井と床に細い空気管が張り巡らされていて、異常を来すとセンサーが鳴る自動火災報知器のお陰ですぐに発見され、消火ができたので大事には至りませんでした。また、文化庁から柵を設けなさいと指導があり、現在は柵もセンサーも設置しています。ただ、言うのは簡単ですが、実際のところはなかなか簡単ではありません。例えば、所有の境内地内であるにもかかわらず、手摺をつけるという申請ですら許可が下りるまでに3か月程度かかるなど、思うように事が運ばないのです。

楼門は予備診断で耐震補強をしなさいと言われたのですが、本診断では拝殿ともに問題はないという結果になりました。楼門は650年程経っていますし、拝殿も900年足らず経っています。今までに大震災が起こってきたなかでも一応保たれてきていますので、これからもぜひこれらの文化財を後世に残していきたいというのが私た

ちの希望です。皆様方もそういった所有者の思いを噛み締めていただきながら、建造物をご覧になっていただければと思います。

【講師と参加者による質疑応答】

Q. 伐採後の植樹は考えられていますか？

A. 危険木や文化財の建物に影響を及ぼす木は伐採していますが、その他のところへは植樹をしています。当宮の拝殿や楼門など、主たる建物はすべて檜皮葺です。そのためなのか、境内林のほとんどにヒノキが植えられています。お陰で、石上神宮で使う檜皮葺の檜皮は他から調達することなくすべて賄うことができています。それは、歴代、神社をお守りしてきた方々の努力によるものであり、かけがえのない財産となっています。

Q. 宝剣「小狐丸」は本当の刀剣ですか？

A. 宝物収蔵庫の中に保管されている刀剣で、奈良県指定文化財です。「小狐丸」の名が伝わる「義憲作」の銘が刻まれた太刀なのです。七支刀は錆びていますが、他の刀剣類は刀匠の方に手入れをしていただく努力をしながら保管に努めています。

Q. 行政や学者の方が文化を伝承されていると思われませんか？

A. 例えば、行政や学者が考える設計や修理方法と、修理事業者が提案する方向性には齟齬が生じる場合があります。学問上の知識で言うておられる文化財担当者の方と現場をみる修理事業者では、技術を持っている方々の方が正論のように思います。行政の方は担当から外ればそれで終わりですが、文化財修理を続けて商売としている方たちは、間違った方針を提案するとダイレクトに自分たちに跳ね返ってくるだけでなく、屋根葺き職人の誇りや人生にかかわることなので、文化財にとっての最善の方法を提案してくれるように思います。

もり まさてる 森 正光氏プロフィール

昭和23年(1948) 奈良県天理市生まれ
 昭和49年(1974) 國學院大學文学部神道学科 卒業
 " 石上神宮権禰宜 就任
 昭和52年(1977) 同大学院 神道学 修了
 その後、宮城県志波彦神社・鹽竈神社に奉職
 昭和62年(1987) 石上神宮 再度奉職
 平成12年(2000) 石上神宮宮司 就任
 奈良県神社庁長、神社本庁理事などを歴任
 神社本庁錬成行事道彦、神社本庁参与などを長らく現任

第2回「Life～コミュニティデザインのちから～」

(株) studio-L 代表 / 関西学院大学 建築学部

教授 ^{やまざき}山崎 ^{りょう}亮



日時 ● 令和5年1月21日(土) 14:00～16:00

会場 ● 文化財建造物保存技術研修センター

建築設計に携わるなかで、地域の課題解決につながるワークショップの必要性に着目し、「studio-L」を設立された山崎様。「Life」が何を意味するのかを伺いました。

【講演内容要約】

誰もがもつ「Life」のちから

2005年に「studio-L」という会社を立ち上げ、「コミュニティデザイン」の仕事をしています。コミュニティデザインって何だろうと思われている方が多いと思いますが、地域のコミュニティの方々と一緒に、その地域の空間をデザインする、あるいはデザインを考える、という意味で「コミュニティデザイン」と呼んでいます。地域の方々と一緒に、その地域の未来をデザインできたらいいなと思っています。

講座のタイトルに「Life」という言葉が付いていますが、会社名の「L」はこのLifeの「L」です。「Life」には色々な意味があるようで、最初に思い浮かぶのが生活、人生ですが、命や活力というのもLifeなのだそうです。Lifeの中には、人間が生きていく上での原動力となるものが全部入っているうえ、全員が持っているものです。その力をうまく合わせていけば、いいことができるのではないかと思います、自分の会社名に「studio-L」、Lifeという言葉をつけました。

実は、19世紀イギリスの思想家 ジョン・ラスキンの著書に、今、お話したようなことが書かれています。「Life、つまり皆さんの人生、生活、命というものの中には、色々な力が含まれています。皆さんはもうすでに、Lifeという財産を持っています。高い車や大きな家、たくさんの貯金が最大の財産とされているようですが、そうではなくて、あなたの財産はあなたの人生そのものです」と言い切った方です。そ

して、「Lifeには、人を愛し、その人を支えたり、その人がうまく物事を成し遂げるためにサポートしたりする力も入っています。あなた自身の人生という財産をフル活用して、いわば資産運用して、周りの人たちにいい影響を与え続けてください。そういう人がたくさん住んでいる地域が、本当の意味での豊かな地域だと言えるのではないのでしょうか。僕自身が今やっているのは、まさにそういう「人生」という財産をみんなが少しずつ出して、地域の未来について話し合ったり、活動したりすることに携わる仕事なのです。

具体的な例で、お伝えしていこうと思います。

ワークショップが解決の道筋

大阪の茨木市に市民会館の跡地があります。そこに建築家 伊東豊雄さん設計の図書館を含む大きな複合施設ができるのですが、その設計に市民の意見を入れたいということで呼ばれました。市民の話し合いをして、その内容を設計に反映させるというのが一つです。ただ、まだ完成していませんので、話し合いの結果でどうなったかということをご伝えることはできません。我々はこの話し合いのことを「ワークショップ」と呼んでいます。もともとは工房とか工場という意味の英語で



コミュニティデザインに興味を持ち、熱心に耳を傾ける参加者

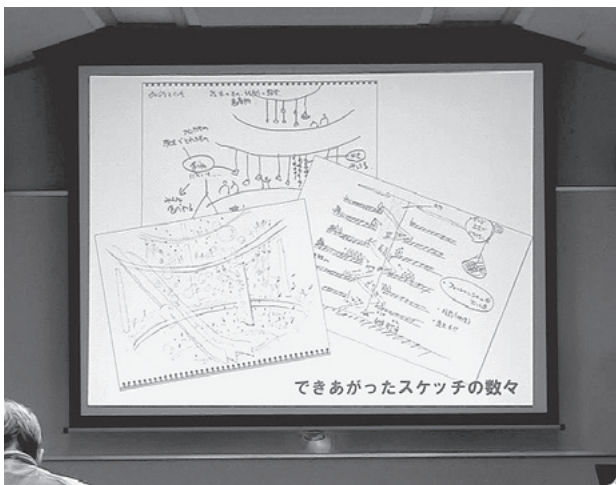


「みかたがかわっ展」に参加の親子

話し合った内容を絵にして平面図に

すが、人々がそこに集まって、いろいろなアイデアを出し、このアイデアを組み合わせる新しい価値をつくり出すという作業なので、ワークショップと呼んでいます。

月に1回ずつ、5、6人ぐらいのチームに分かれて話し合ってもらい、それを共有しながらまとめていくのですが、SNSだったりチラシだったり講演会の参加者に呼び掛けたりと、ワークショップの告知方法は様々です。この度はコロナ禍なので密になれず、



ワークショップで出てきたアイデアの数々

会場を3つに分けてどの会場にも意見や写真が写し出されるようにしました。少し集まれるようになったときには、模型や平面図を用意して、それぞれの意見を絵に描いてもらったり、「みかたがかわっ展」という展示会を1週間ほど開けばなしの部屋を用意して、参加者が話し合った内容を紙に書いて貼り付けてもらったりと、皆さんの痕跡を残せるようにしました。

その後、ワークショップで出たそれぞれの意見をまとめて設計会社に渡し、さらに話を進めていくという流れになります。建物が決まり工事に入るようになれば、次はその運営を計画するのがもう一つです。こんなことを

したいというチームが生まれてきていますので、一緒に活動の準備をしているところです。我々が楽しいと思う活動が、誰か別の人の人生を豊かにするというのが、この施設でのコンセプトになりました。

Life、人生という言葉がやはり出てくるのですが、これまで設計というのは、建築家が自分の作品として思い通りにつくろうとするようなところがありました。今は、公共施設をむやみにつくる時代でもなくなりましたので、そこを使う人たち、工事に携わる人たち、維持管理する人たち、地域の人たちの意見を聞きながら設計を進めたほうが、持続可能で面白い建築物が出来上がるのだろうと思っています。

地域と共に寺の未来を変える

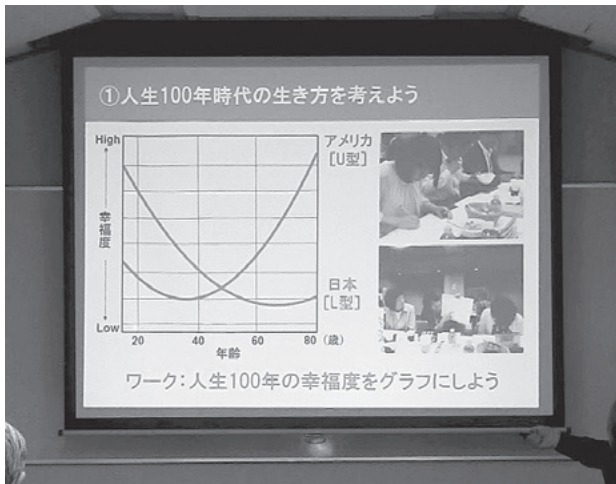
何年か前に、京都・本願寺の浄土真宗大谷派の方から講演依頼がありまして、コミュニティデザインについてお話ししました。「真宗大谷派でもコミュニティデザインをやるべきである」という話になったようで、後日、お電話をいただきました。ただ、京都のお寺ではやってくれるなど言うのです。「今、地方のお寺は門徒(檀家)さんが減るばかりで経営が成り立たない。京都のお寺でコミュニティデザインが成功しても、京都だからだと言われて地方のお寺を元気づけることはできない。これでもかというぐらいのへき地でやってほしい」とのこと

で、派遣されたのが北海道の根室別院でした。真宗大谷派では、住職が「輪番」、お坊さんが「列座」と呼ばれています。輪番が1人と、20から30代ぐらいの列座が6人いるようなところでした。「人生100年、我々はどう生きたらいいか」をテーマに、地域の方々に集まってもらい、このお寺を使って自分たちは何か面白いことができないうかという話し合いを始めてもらうことにしました。「お寺だと入りづらい」と言う声がありましたので、カフェを入口にして、まずはお寺に来てもらうことを考えました。来てもらってから宗教的に本当に伝えなければいけないことを伝えていくというやり方です。仲間づくりがあったり、生涯学習ができたり、グリーンケアがあったり、孤食防止や生きがいづくり、健康づくりがあったりと、人生100年時代のキーワードは、ほとんどお寺でできてしまうわけです。

100人程の参加で、畳の上でできるプロジェクトを考えてもらいました。「ヨガをやりたい」「映画を上映したい」「子ども食堂をやりたい」等々、8つのチームが誕生したので、月間スケジュールを作って地域に配りました。ところが、列座さんたちは自分の仕事が増えると、当初は乗り気ではないようでした。そこで、この8チームが来たときに、何か声を掛けられたら教えてあげるぐらいで、あとはご自由にどうぞと言えるようにしようとお寺を本当にカフェにした意味がないので、お寺が空いている時間にカフェをします。地域の人た

ちがカフェイベントの準備をして、運営をして、それは、人生100年時代を自分たちで考えていかなければならないということです。

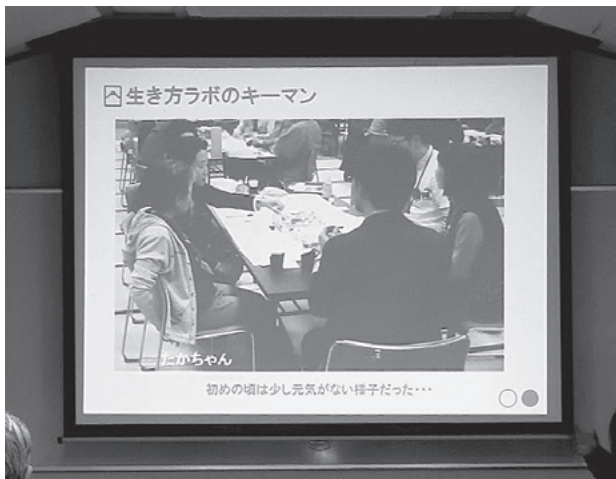
アメリカ人たちの幸福度というのは、40歳ぐらいがどん底だそうです。ただ、ここからハッピーリタイアメントに向けて幸福度がどんどん上がっていくのです。日本人はその逆です。だんだん下がって行って、70歳ぐらいがどん底です。これは、いかにももったいないので、どこかからぐいっと幸福度を上げないといけない。「幸福になるために誰と何をすればいいのか、そんなことを考えていきましょう。いままでの人生はどうでしたか」というようなことをワークショップで問い掛けたりもしました。



アメリカと日本での幸福度の違いを表したグラフ

価値が高まる、人とのつながり

こういう話し合いをしているとき、ずっと見て観察しているのが我々の仕事なのですが、その中にやる気のない「たかちゃん」という人がいました。2か月前に旦那さんを亡くされ、家の中にこもっていたので、それでは駄目だとお友達がこのワークショップに引っ張ってきたのでした。最初の頃は発言もなかったのですが、映画上映に必要なスピーカーがないという話になったと



話し合いに意欲的でないたかちゃんの様子

き、たかちゃんの旦那さんが趣味で揃えていたスピーカーが家にあると話し始めたのです。家に連れてきて、スピーカーをみんなにみてもらったときからたかちゃんは変わっていきました。それからは、このチームを動かす中心メンバーになったのです。

暗い気持ちを少し和らげてくれるのは、人のつながりです。我々の悩みは、人のつながりからもたらされるのですが、勇気づけられるのも人のつながりからです。たかちゃんが元気になったのは、同じチームの人たちと一緒に何かに打ち込んだり、自分の役割がそこに生まれたりしたからです。人生100年時代を考えると、誰にでも思いがけないことが起こります。そのときに、人とのつながりで痛みをどのように和らげていくのかは、まちづくりとかワークショップなどに参加していただくと実感できるのではないかと思います。

「何をすれば地域が元気になりますか」と問い掛けると、必ずといっていいほど「流しそうめん」という意見が出てきます。そのとき、コミュニティデザイナーが何をしなければならないかという、「いいですね」と言いながら、一番隅っこに追いやって、ほぼなかったことにすることなのです。やはりこの根室でも流しそうめんという意見が出ました。なかったことにしようと思ったのですが、よくよく考えてみたら、北海道には竹が存在しないので、面白いのではないかなと考えました。「また1か月後に来ますので、その間に流しそうめんを試し



掲載された寺カフェイベントの新聞を紹介

ておいてください」と伝えて帰りました。すると、竹がないから、塩ビの雨樋を使ってやってみたが、美味しくないと言うのです。そこで、親戚が住んでいる熊本から竹を空輸してもらい、根室では恐らく、史上初の竹を使った流しそうめんをしました。寺でイベントをやった翌日、新聞には「コミュニティづくりに寺活用」という内容とともに竹の写真が掲載されました。これで勢いづいた皆さんは、イベントを定期的にやろうという盛り上がりになりました。

他にも様々な取り組みが行われた中で、列座さんたちが自分たちも何かやりたいと始めたのが「坊主バー」で



「Yes,And」ゲームを行って体感してみる参加者

す。意外にもお坊さんなら安心と、若い女性たちがやってくるようです。根室別院でのここのまでの取り組みや経緯をまとめたマニュアル冊子が、全国2万の浄土真宗大谷派のお寺に配布され、今では全国にあるあちこちの寺で自分たちなりの取り組みが始まったと聞いています。

【講師と参加者による質疑応答】

Q. 地域のコミュニティが薄れてきていますが。

A. コミュニティには、地域の縁でつながる地縁型と、同じ興味からつながる興味型の2種類あると思います。この興味型のコミュニティは今どんどん力をつけてきていますが、地縁型のコミュニティはどんどん弱ってきています。ただ、残念ながらこの先、地縁型が強くなることはないだろうと思います。ですから、興味型にいかにして地縁型を入れ込むかということが、すごく大事になってくるのではないかと思います。

Q. 組織内で「心理的安全性」が注目されていますが、地域でも同じ捉え方をしているのでしょうか。

A. 「Yes,And」というゲームで心理的安全性とはどういうものか体感してもらいましょう。(2人1組になって、断られてもAさんがBさんを誘い続ける。例えば、「この後、ご飯を食べに行きましょう」など。Bさんは理由をつけてすべて断わるということを2分間体験)これは会社の会議でよく起きている場面です。提案を全て否定されれば、やがて誰も提案をしなくなります。1つ目で否定されると、あと4つ聞いたら出てくるはずだった素晴らしいアイデアが出ないまま会議が終わることになります。どことなく

らないアイデアでも「いいですね」と、一旦は話を聞く姿勢がある会社は安全性が担保されていると言えるのです。自分の考えや気持ちを誰に対しても安心して発言できるので、新しい行動が生まれ、新しいアイデアが出てきます。これをまさに地域でやっているのが、我々の仕事になります。その中から、本当に地域を変えるような意見が出てくるのを探すのです。

やまざき りょう 山崎 亮氏プロフィール

昭和48年(1973) 愛知県生まれ
 平成4年(1992) 大阪府立大学 農学部 入学
 平成7年(1995) ロイヤルメルボルン工科大学 留学
 平成11年(1999) 大阪府立大学大学院 修了
 // 株式会社SEN環境計画室 入社
 平成17年(2005) studio-L 設立
 平成25年(2013) 東京大学大学院 修了

●studio-L代表、関西学院大学 建築学部 教授、コミュニティデザイナー、社会福祉士

●主な著書:「コミュニティデザインの源流(太田出版)」「縮充する日本(PHP新書)」「地域ごほん日記(パイインターナショナル)」「ケアするまちのデザイン(医学書院)」など。

[著書一覧はこちら]

<https://note.com/yamazakiryoy/n/n5e1ea1f4979e>

[YouTubeチャンネルはこちら]

<https://youtube.com/c/山崎亮99>

謹んでご冥福をお祈りいたします。

訃報

鈴木 嘉吉 さん

[93 歳]
東京都出身



鈴木嘉吉様が令和4年12月16日に亡くなりました。

多年にわたり建築史学および文化財保護の分野での類稀なる業績によって、建築界に対して大きな貢献を果たされました。また、当会では平成10年より令和3年度まで名誉会長を務めていただき、当会の発展にご尽力を賜りました。

ご生前のご功績を称え、深く感謝の意を表しますとともに、在りし日の鈴木嘉吉様を偲びつつ、謹んでご冥福をお祈りいたします。

鈴木先生を偲んで

岡山理科大学 建築歴史文化研究センター長
特担教授 江面 嗣人

鈴木先生とは個人的な深いおつきあいをする機会は無かったが、工作上、数々の助言や教えをいただいた。その思い出を記して、追悼の一文とさせていただきます。

私が鈴木先生を知ったのは、文化庁に入ってからのことであり、最初は全国社寺等屋根工事技術保存会を介して、縁することとなった。文化庁に入庁して数年後、企画部門に異動し、選定保存技術を担当すると、保存会から空席になっていた名誉会長の選定を依頼され、当時の建造物課長(村上氏)と相談し、鈴木先生の名前が上がることとなった。先生は古代建築研究の権威であり、お受けいただけるかを心配しつつ連絡をとったが、快く承諾していただき、無事、就任していただいた。

その後、私は選定保存技術の担当として、保存会の行う研修会等で鈴木先生に頻繁にお会いしたが、研修会では歴史的建造物の現地見学を兼ねることも多く、その時はたびたび鈴木先生に説明をお願いした。先生は現地での急な依頼であっても、快く引き受けていただき、理路整然と建造物の歴史や特徴を分かりやすく説明され、先生の歴史に関する記憶の豊富さに驚かされることしばしばであった。

私が建造物課の指導部門を担当していたときには、先

生は文化庁の建造物部会の審議会委員でもあり、委員会でたびたび意見をいただくことがあった。当時は資料を模造紙に書いて前に張り出して見ていただいたが、ご指摘の内容は単なる歴史的な知識に留まらず、復原部分のプロポーシオンや割合等の指摘をされることがあった。鈴木先生の歴史的建造物に関しての体系的な知識と感覚に感心させられると同時に、一流の学者のレベルを強く意識させられた時でもあった。もう一つ、強く記憶に残っているのが、審議会において私が担当した岡山県の吉川八幡宮本殿の建築年代について助言をいただいた時のことで、年代の判断に対して、やはり感覚的に年代が違うと思うとの意見をいただいたことがあった。当時は社寺に関する私の知識も十分ではなく、明確に理由を確認できずに終わってしまったが、もっとしっかりと聞いておけば良かったと未だに残念に思っている。

鈴木先生は古代建築の泰斗として、日本の建築史に幅広い見識をもち、日本建築史の学術的分野において、幅広い活躍の場をもった貴重な存在であった。その貴重な人物を失ってしまったのは、極めて残念であるが、先生より受けた数々のご指導に感謝しつつ、心よりご冥福をお祈りしたい。

「古文化 128 号 準会員名簿」一部訂正とお詫び

古文化128号掲載の準会員名簿におきまして、一部誤りがございました。
謹んでお詫び申し上げますとともに、下記の通り訂正・追加いたします。

No.	誤		正	
	氏 名	職 種	氏 名	職 種
23	大西 薫利	檜皮葺・柿葺	大石 薫利	檜皮葺・柿葺
59	小西 洋介	茅 葺	小林 洋介	茅 葺
65	佐藤 偉人	茅 葺	佐藤 偉仁	茅 葺
99	橋本 理恵	檜皮葺・柿葺	橋本 理穂	檜皮葺
141	(記載漏れ)		山崎 豎登	檜皮葺・柿葺

ご不便・ご迷惑をお掛けしますことを深くお詫び申し上げます。

発行所

京都市東山区清水二丁目 205-5
文化財建造物保存技術研修センター内



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

TEL 075-541-7727 FAX 075-532-4064
<http://www.shajiyane-japan.org>

古文化 第129号

令和5年1月31日発行

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

あ と が き

サッカー史上初の中東開催となったカタールワールドカップ。アルゼンチンの優勝で幕を閉じました。人権問題や外国人労働者の死亡事故など多くの問題点もありましたが、日本代表はドイツとスペインを破り、グループリーグを1位で通過。世界を驚かせてくれました。サッカーだけでなく、もう一つ世界に注目されたことが、日本人サポーターの清掃活動です。立つ鳥跡を濁さず。日本人にとっては当たり前のことでも、海外の人から見れば素晴らしいことなのだと再認識しました。日本人が注目され、世界の人々に日本の文化を知ってもらうきっかけになればありがたいです。

今冬もインフルエンザと新型コロナの同時流行が懸念されております。引き続き感染症対策を行い、保存会事業も進めていきたいと思っております。

来年度もご理解、ご協力をお願い申し上げます。

大野 浩二さんの古里

「蘇る地域文化 丹波市」

(兵庫県丹波市山南町)

檜皮葺の屋根は、2020年末にユネスコ無形文化遺産に登録された。同じユネスコの世界遺産は、歴史的建造物や雄大な自然景観など形あるものを対象とするが、無形文化遺産は人類の創造性を証明する伝統技術などを登録する制度だ。後継者不足から存続が懸念されたこともある檜皮葺の技術が、世界的に価値あるものと評価されたことはまことに喜ばしい。

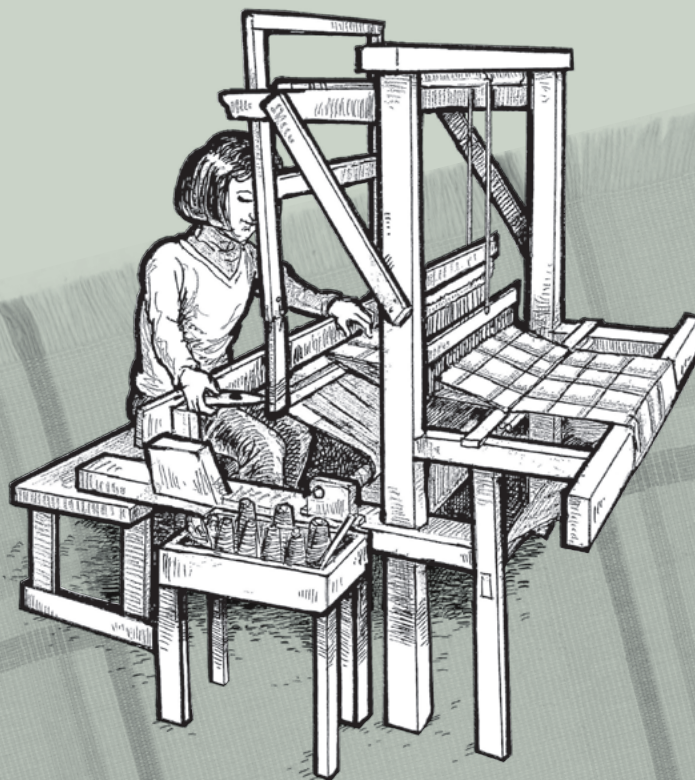
(公社)全国社寺等屋根工事技術保存会の現会長である大野浩二さんのふるさと丹波市山南町は、兵庫県中央部に位置し檜皮の代表的産地として知られる。市内の山林で行われる檜皮採取は檜皮葺技術の出発点であり、今回の文化遺産登録の原点ともいえる。

その丹波市の名を冠した「丹波布」という織物がある。江戸時代に丹波国佐治村で織られていた手織り布で、当時よく使われていた綿糸に、屑繭から紡ぎ出した絹糸を交織する点に特徴がある。糸を藍に加えて栗、ヤマモモなどの樹皮を染料

とした草木染にして、モダンな縞柄やチェック柄の布に織り上げる。野良着として使われたというが、今見ても随分とおしゃれな感覚がうかがえる。幕末から明治にかけて佐治村の農家で盛んに生産されたが、大正時代に入ると工業化が進んで手織り布は衰退し、ついには織る者がいなくなってしまった。

時代の中で消失し一時は忘れ去られていた丹波布だが、昭和になって高名な美術評論家 柳 宗悦が京都の朝市で見知らぬ縞木綿を発見したことが復活の兆しとなった。それが丹波で織られたものと知った彼の後援により、1953年(昭和28年)に丹波布技術保存会が発足する。丹波市が地元の文化遺産として伝承者の育成に努め、丹波布は1957年(昭和32年)に国の選択無形文化財に選定された。

市内県道沿いの「道の駅あおがき」には丹波布伝承館が設置されている。丹波布が完成するまでの複雑な工程と製品を展示する入場無料の観光スポットで、一時は消滅した地域文化が復活した好例をここで見る事ができる。



古文化

第 129 号



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会